

Writing Lab Pilot Scheme at Hokkaido University: Background, Outcome, and Future

Eijun Senaha*

Graduate School of Letters, Hokkaido University

Writing Lab 試行運営：取組・成果・展望

瀬 名 波 栄 潤 **

北海道大学大学院文学研究科

Abstract — This essay introduces a history of Hokkaido University's preliminary development for founding a writing service for students. The idea was developed by a working group of HU's International Affairs Office and, after a two-month pilot period, the working group came to conclude that it is necessary to found a writing lab not only for the students, but also for the university's internationalization.

The first section defines the writing lab as a place of service for any HU student who wishes to develop his/her written communication skills in English and Japanese as s/he learns the development of an idea, "critical thinking," with a tutor at the lab. Native-speaker checks will not be a primary task of this service as it has been reported as being intimidating and therefore non-educational.

The next section mentions the structure of this service, which consists of a writing lab steering committee, a coordinator, and graduate-student tutors. The following section introduces the outcome of the pilot project and reports that the students' positive responses and expectations for the start of the "actual" writing lab were overwhelming.

In conclusion, the holistic cooperation of the university is required for the success of this writing service if its formal foundation is to be considered seriously. The essay also suggests several practical ideas for its foundation.

(Received on 10 August, 2010)

1. はじめに

本学国際交流室ライティング・ラボ設置準備作業部会（以下、本WG）は、2009年5月8日に開催された国際交流室会議において、本学の理念や現状に即した Writing Lab（以下、WL）を設置するため

の企画立案を目的として設置された。本WGは、先進的な取り組みをおこなっている他大学の視察並びに勉強会をおこない、本学に設置するWLの運営体制等について議論を重ねた。本WGは、WG会議を四度、そして勉強会や他大学のWL視察をおこなった。視察先は、東京大学教養学部、早稲田大学ライ

*) Correspondence: Graduate School of Letters, Hokkaido University, Kita-10 Nishi-7 Kita-ku, Sapporo 060-0810, Japan

**) 連絡先：060-0810 札幌市北区北10条西7丁目 北海道大学大学院文学研究科

ティングセンター、千葉大学、一橋大学、北星学園大学、龍谷大学等であった。また本学留学生センターが主催した佐渡島紗織氏（早稲田大学）の講演会『よい書き手を育てるアカデミック・ライティング指導』（10月6日）にも出席し、WL運営のためのノウハウを学んだ。

2009年度後半には、試行運営（於：エルムの森）を行った。11月16日（月）から平成22年2月12日（金）までの毎週月・水・金（1200～1600まで受付）で、計30日間の運営だった。運営中468コマ（1コマ60分）分のチューターが参加した。WLの試行運営により、WLへの需要が非常に高いことと同時に、本学における本格的なWL運営にはいくつかの課題があることも確認した。

試行運営での経験を実りあるものとし、全学の組織的理解と協力を得て、来るべき本格運営を万全のものにするために、現段階で提言できる今後の課題等を最終報告として2010年3月11日に国際交流室会議に提出した。本稿ではWLWGの最終報告書に加筆修正し、Writing Lab設置の意義についてまとめることにする。

2. WL 設置の背景と目的

本学における外国語教育の充実は長く切望されてきた。「北海道大学における今後の外国語教育の在り方について（最終報告）」（平成18年5月17日）には、「多様な民族、文化、宗教が混在する状況では、相互理解、協調協力、共存共生の精神のもとに仕事ができる人材が求められる。本学の国際性の涵養の理念は、国際社会に貢献できるこうした人材の育成によって実現される」と記されている。

また、第二期中期目標・中期計画（案）には、「教育の国際的通用性を向上させ、学生の国際的流動性を高める」ことが目標として掲げられ、「学士課程及び大学院課程において、英語等の外国語による授業を増加させる」「外国人教員を増員するための環境整備を行う」「留学生を対象とする修学・生活支援を強化する」などの計画が挙げられている。WLの設置は、これらの目標・計画の具体化の重要な一歩となる。

教育の国際化を進める本学には、現在84カ国か

ら1,200名近くの留学生（2010年5月現在）が在籍しているが、彼らを対象とした全学的論文指導サービス組織は存在しない。また、外国語による論文執筆を希望する日本人学生や外国語で課題提出を求める授業の数も増加しているが、これに対する全学的な支援制度もない。

本WGが提案するWLとは、本学に在籍するすべての学生に対し、英語及び日本語による論文執筆指導を行うアカデミック・サポートを提供する施設（部屋）のことである。ここでは、日本での日本語表現能力の向上と国際語である英語による表現能力を日本で養うという双方向での国際化を目指す。そして、母語もしくは母語と異なる言語で課題レポートや学位論文等を執筆する学生に、論理的思考及びネイティブ・チェックなど論文作成の能力向上のための個別指導をおこなう。

この新たな学生支援により、国際的に通用する高度な言語表現能力を養成し、本学で創造された知の活用及び発信を可能にする。

3. 運営・管理体制

本学においてWL本格運営を開始する際には、責任ある持続的な運営体制を確立するため、学内教員で構成される運営管理委員会を設置し、WL運営計画や運営のための管理・指導等の統括をおこなうことが望まれる。その下に、現場を直接的に管理運営するコーディネーターと実際の指導をおこなうチューターをおく。コーディネーターは本WLでの一連の業務を掌握、調整、管理し、チューターは実際に学生への日本語・英語論文執筆指導をおこなう。平成21年度11月から2月までの試行運営では、本WGが運営管理委員会を担い、WLにコーディネーターと訓練を受けた大学院生をチューターとして配置した。試行運営は、11月16日から2月12日までの月・水・金の計30日間、正午から午後5時までの5時間の期間限定運営とした。以下が、試行運営での体制とその任務内容である。

運営管理委員会：

運営のための計画（年間の予算など）やガイドライン、ならびに添削のためのマニュアルを作成し、

HAWL

Hokudai Academic Writing Lab

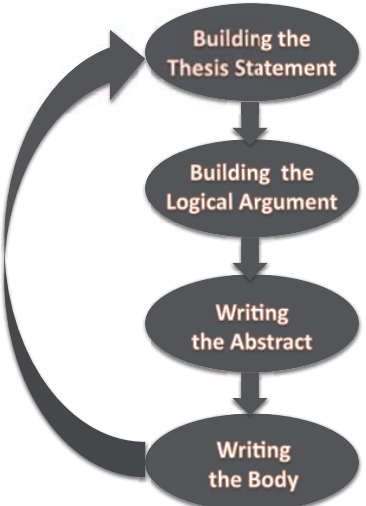
試行運営

Writing Is Thinking

学術論文の基本的な目的は、結論へと至る論理的ステップを提示することによって、論文の主張する結論を受け入れるよう読者を説得することである。



11月16日から北大初の
ライティング・ラボが
始まります！



Opening Hours: (Pilot Scheme only)
12:00 - 16:00 Monday, Wednesday, Friday
 期間：11月16日（月）～2月12日（金）

Location: (Pilot Scheme only)
 北大交流プラザ「エルムの森」多目的室

Services: (Free!!!) 無料

(1) One-to-one basis tutorials on dissertations, essays, reports, abstracts and others. (2) One-to-one basis tutorials on how to form a thesis statement for your research, and how to build a logical argument based on the thesis statement. (3) One-to-one basis tutorials on how to write abstracts, introductions and conclusions. (4) Native check (limited to abstracts and papers which are less than 6 pages). (5) Regular courses on Logical Thinking Skills in Academic Writing.

HAWL website:
http://web.me.com/wailinglai/HAWL/HAWL_Home_Page/HAWL_Home_Page.html

個別指導

本ラボは皆さんの能力を最大限に活かしながら、よりよい論文・レポート作成のお手伝いをします。

(i) 課題レポート・学位論文等に関する個別指導 (ii) アカデミック・ライティングに関する定期的な講義 (iii) ネイティブ・チェック（アブストラクト、課題レポート）

問い合わせ先：本作業部会座長・瀬名波栄潤
 Email: june@et.hokudai.ac.jp Tel/Fax: 011-706-4085

図 1. HAWL のポスター

表 1. 運営管理委員会構成員（平成 21 年度国際交流室WLWG構成員）

座長	瀬名波 栄潤	（文学研究科，国際交流室室員）
	安藤 厚	（文学研究科，高等教育機能開発総合センター，教育改革室室員）
	加藤 重広	（文学研究科）
	河合 靖	（メディア・コミュニケーション研究院）
	柳町 智治	（留学生センター）

運営のための管理・指導等の統括を行う。

ガイドラインでは、日本人学生及び日本語を母語としない学生に対し、日本語及び英語の論文指導を行うことを主たる業務とし、そこでは、論理展開に重点を置いた論文指導を行い、基本的な言語表現のネイティブ・チェック添削サービスは副次的なものとした。というのは、最近ではネイティブ・チェックに重点を置いた論文指導は学生の執筆意欲を削ぐものであり教育的効果が低いとの分析結果が出ており、これに対して理論展開に重点を置いた論文指導は持続発展的な教育効果がある教授法として評価されているという認識に基づいた結果である。

チューター等への謝金については、国際交流室が平成 21 年度総長室重点配分経費により賄った。

運営管理委員会構成員（平成 21 年度国際交流室WLWG構成員）は表 1 の通り。

コーディネーター：

試行運営では、大学院共通授業科目等でアカデミック・ライティング授業の指導経験のある講師 Paul Wai Ling Lai 氏をコーディネーターとして依頼し、WLを実際に運営する責任者になってもらった。Lai 氏は、哲学や論理学等の知識を背景に、理論展開に着目する論文指導で実績を築きあげていた。彼には、運営管理委員会での講演会で具体的指導理念や方法を説明してもらい、チューターへのワークショップや個人指導でも尽力してもらった。急造のWL試行運営が成功したのは、彼の存在があったからだ。

具体的職務は、コーディネーターはチューター養成のワークショップの定期・不定期開催、チューター

人材バンクの作成・管理、添削希望学生たちとの予約の取りまとめ、謝金申請書類等の事務処理などである。また、コーディネーターはWLでの一連の業務形態を掌握、調整、管理し、労働環境を含めたWLの健全な運営並びにチューターの質の向上に努めると同時に、不測の事態に備えた。

チューター：

全学の優秀な学部並びに大学院生が採用の対象。学生の学内雇用拡大というメリットがある。応募者は、履歴書、成績証明書（全学教育科目の「論文指導科目」を取っているのが望ましい）、簡単な Writing Sample（添削させてもよい）を提出。面接の上、チューターの採否が決定する。採用決定後は、添削可能言語、添削可能分野、労働可能時間帯（カレンダー）等を登録する。

実際に、試行運営では、チューターは常時 4 名が待機するよう配置し、試行運営期間中合わせて 468 時間勤務した。また、チューターは、定期及不定期に行われるワークショップに出席し添削能力を向上させるよう努めること、同時に添削上のガイドラインやマニュアルの遵守、そしてWLの一員として責任ある行動をとることを義務づけられた。

運営方法：

WLでの添削依頼方法は、原則予約制とし、インターネットを通して申し込めるようにした。予約なしの学生には、常駐のチューターが対応するようにした。添削時間は 45 分程度で無料。チューターは、指導の前後に 15 分程度の準備並びに添削レポート作成をし、添削内容を記録に残す。予約は連続して

取ることも可。被添削学生にはアンケートまたは添削指導への評価を依頼し、今後の運営資料として役立てた。

4. 試行運営の成果

試行運営は、正味 30 日間という短期間であった。広報が十分に浸透する前に終了してしまった。にもかかわらず、口コミによって学生たちの訪問数が増加するといううれしい誤算を生んだ。その間の成果は以下の通りである。

述べ 40 名の学生が計 98 セッションの論文指導を受けた。11 月 16 日から 12 月 18 日までの前半（正味 14 日間）では 36 件のセッションがあった。後半の 16 日間では 62 セッションまで申し込みが増えた。大学院の学位論文提出締切が 1 月に集中したことも起因していると思える。が、それ以上に、学生からのアンケートにも示されたように、学生間の口コミによって草の根的に評判が広まった。

訪問学生の 7 割以上が大学院生で、10 学部・研究科学生が本 WL を利用した。国籍別では、日本人が 6 割、残りは 12 カ国からの学生が利用した。6 割程度の学生は 1 回の指導で済ませており、内容は学会発表の資料の添削依頼が多かった。二度以上 WL を利用した学生は全体の 4 割で、学位や学会投稿用の論文の指導を受けた。一人当たりの利用回数が多いのは本 WL の特徴で、それは単にネイティブによる添削サービスだけでなく、対話による論文構成に主眼を置いた指導体制であったためと思われる。利用者の 9 割が英語論文等の添削希望者だったため、当初はネイティブ・チェックを期待していたようだが、論理的思考による論文執筆指導を受け満足する声が寄せられるようになった。

試行運営終了が近づくにつれ、WL 継続を望む具体的な声が学生から寄せられた。「広報をもっと積極的にしてほしい」、「もっと継続してほしい」、「存在が知られていない」、「教授らにもっとアピールしてほしい」、「インターネット予約利用をもっとやりやすくしてほしい」、「WL にコピー機がほしい」、「北 18 条あたりでの開設を望む」、「1 セッション当りの利用時間を長くしてほしい」、「同じ専門分野のチューターがほしい」、「論文の構成について非常に

論理的な指導をしてくれて、問題点も明確になり大変参考になった」などである。数値データについては、添付資料をご覧ください。

5. 課題：教育改革室と国際本部との協働体制の確立

本学における WL の設置と持続的な運営のためには、全学的な、特に教育改革室と国際本部（編集者注：2010 年 7 月に「国際交流室」より改編）との協働体制が必須である。ライティングセンターや外国語リテラシーへの取組の必要性は、これまでも本学の国際化促進の課題として両室で認識されてきている。日本人学生（並びに非英語圏出身留学生）のための英語論文指導と留学生のための日本語論文指導はいずれも本学の国際化を成し遂げるための重要なツールであり、教育改革室と国際本部が協力して取り組むべき課題である。

また、その実行組織としては、留学生への教育と支援を担当する留学生センター及び全学教育における外国語教育を担当する外国語教育センターの協力に加えて、これまで 10 年にわたり全学教育 TA 研修を実施し、最近ではカリフォルニア大学バークレー校の PFF（Preparing Future Faculty：将来の教員の養成）システムの調査・研究を進め、本学におけるその普及（ティーチング指導とアカデミック・ライティング指導の総合的展開）を目指している、両室のハブとして高等教育機能開発総合センター（編集者注：2010 年 10 月に「高等教育推進機構」に改編）の協力が不可欠と考えられる。

6. 展望

以上を踏まえて、WL 本格運営を着実に推進するために、当面解決を要する諸課題を以下に列挙する。

1) WL 常設運営のための場所の確保

より多くの学生のニーズに応えるためには、全学教育が実施され、学生支援組織が集中して配置されており、多くの学生に親しみの深い、高等教育機能開発総合センター、北図書

館周辺に本ラボを設置することが望まれる。ラボ（室）のサイズは、その中に受付のデスクと添削指導用ブース（机一つと椅子二脚）が4～5セット配置されるのが理想的である。40 平方メートル程度は必要である。

2) WL 運営のためのコーディネーター及びチューター等の確保

本ラボを直接管理運営するコーディネーター職には高い専門性と運用能力を備えた人材が必要であり、かつ常設ラボ任務遂行のための長時間拘束にも対応できる人物でなければならない。そのためには、教育改革室あるいは高等教育機能開発総合センターでWL担当のコーディネーターを務められる新たな人材1名の採用を強く要請する。

本WLで、論文指導を学生に直接おこなうのはチューターである。チューターは、コーディネーターの下、ワークショップや指導を受け論文作成指導能力を養う。優れたチューターの養成は、高等教育機能開発総合センターで進めている北大型「次世代のFD・SD・TA研修（PD）プログラム」の開発とも連携できると考えられる。チューターの必要人数は、本年度の試行運営の実績や本格運営時の規模などに基づいて決定する。チューターは本学の大学院学生をTAとして採用し、必要な研修をおこなうこととする。

3) 上記要件の確保のための適正で継続的な予算配分

上記の2要件の確保と維持は、適正で継続的な予算なしでは進められない。総長裁量

経費等を含めた総合的な配慮が必要である。コーディネーターを務める専任教員ならびにチューターの雇用費用そしてWL設備の維持費等の継続的配分・確保の必要がある。

以上、国際社会で活躍できる学生の育成並びに日本人学生や留学生にとって魅力ある北大のアカデミック・サービスの一つとして、このWL設置計画が実現することを強く希望した内容で本WGは最終報告をまとめている。

7. まとめ

今、日本ではあちこちの大学でライティング・センターが設置され始めている。本WGが視察を行った大学ではその後センターの拡充が始まっているところもあれば、新たにセンターを配置する大学も出ている。大学の「国際化」ための必需品となっているようだ。特にG30に採択された大学では、その思いは強い。

本学高等教育機能開発総合センターは、アカデミック・サポート・プログラムの最先端に行くカリフォルニア大学バークレー校や東京大学及び筑波大学等と連携した体制の確立を約束するに至っている。WL試行運転後、本学ではアカデミック・サポートのためのスタッフを10名程度公募することになった。その中の一部としてライティング・ラボ運営のための人材募集もある。が、これが恒常的なWL運営に繋がるとは言い難い。WLは国際化する大学教育の基盤である。グローバリゼーションという大きな潮流のなかで、北海道大学はルビコン川を渡れるのか。

資料

H A W L (Hokudai Academic Writing Lab) 試行運営結果
(2009 年 11 月 16 日～2010 年 2 月 12 日分)
制作：Paul Wai Ling Lai、佐々木香澄

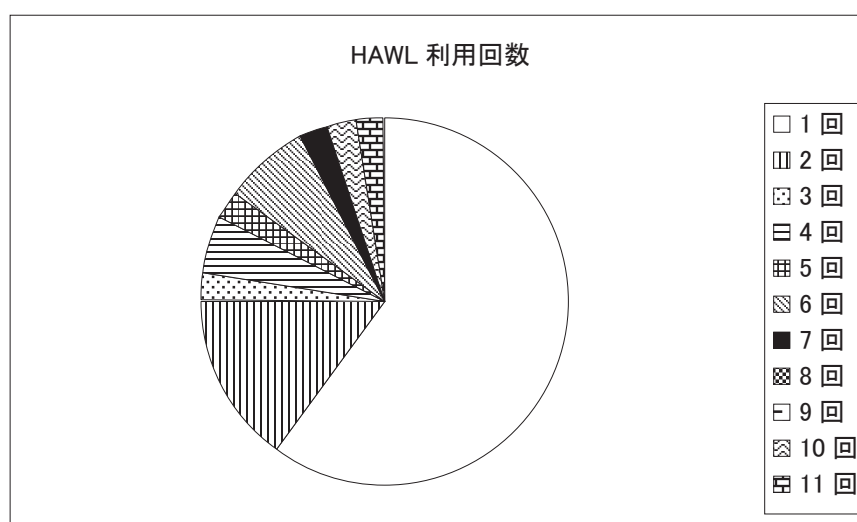


図 2. HAWL 利用回数

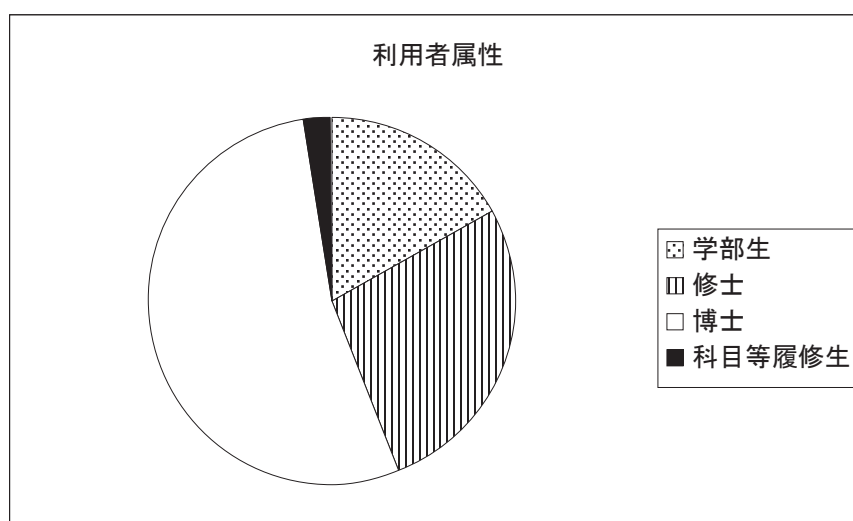


図 3. 利用者属性

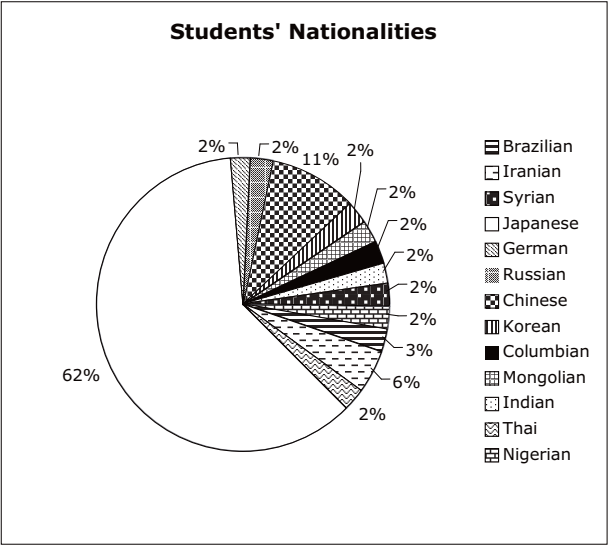


図 4. 国籍

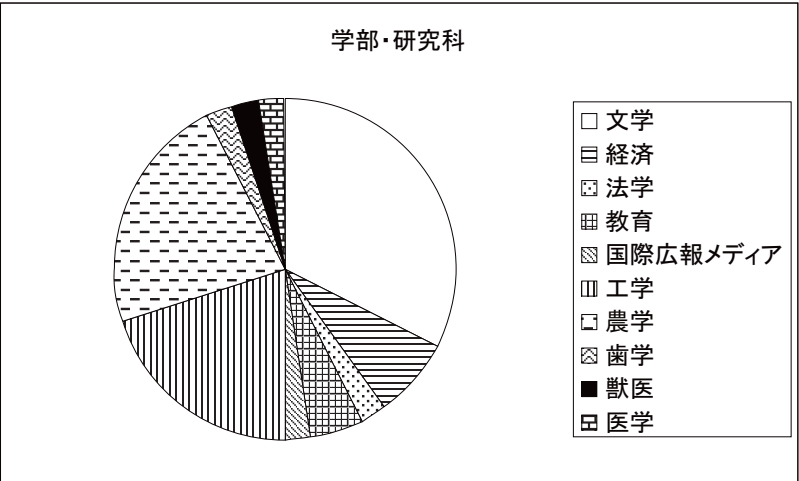


図 5. 学部研究科

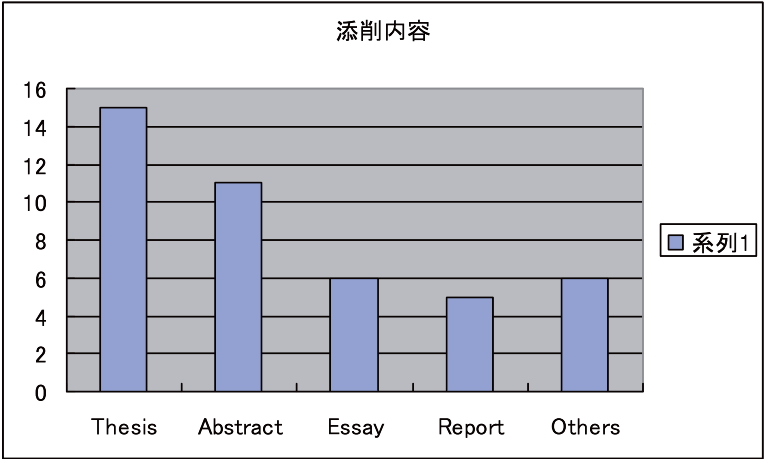


図 6. 添削内容